

「なりた<sup>い</sup>職業」

杜晃樺

あなたはまだ幼<sup>い</sup>時「なりた<sup>い</sup>職業」とい  
う問題を一度は考<sup>え</sup>てみたこと<sup>が</sup>ある<sup>か</sup>。そ  
れ<sup>と</sup>も、こんなテ<sup>マ</sup>の作文を書いたこと<sup>が</sup>  
ある<sup>か</sup>。私もこ<sup>う</sup>い<sup>う</sup>普通の問題をもちろ<sup>ん</sup>  
聞<sup>か</sup>れた。

小学三年生の時、「君のなりた<sup>い</sup>職業」と  
いう宿題をく<sup>ば</sup>られた。その時、頭の中<sup>で</sup>何  
かなりた<sup>い</sup>と全然わか<sup>ら</sup>な<sup>か</sup>った。それで、  
家<sup>に</sup>帰<sup>っ</sup>てすぐ母<sup>に</sup>聞<sup>く</sup>ると、「お<sup>か</sup>あ<sup>さ</sup>ん、  
お<sup>と</sup>う<sup>さ</sup>んの職業は何<sup>で</sup>す<sup>か</sup>。」母は「お<sup>か</sup>あ<sup>さ</sup>ん  
は一<sup>応</sup>工<sup>員</sup>だ<sup>と</sup>思<sup>う</sup>わ。」と答<sup>え</sup>た。そ<sup>こ</sup>  
で、私<sup>の</sup>宿<sup>題</sup>の答<sup>え</sup>も「工<sup>員</sup>」と書<sup>い</sup>た。

翌朝、先生がみんなの宿題の答<sup>え</sup>をシ<sup>ェ</sup>ア  
した。順番<sup>に</sup>私<sup>の</sup>答<sup>え</sup>を讀<sup>ん</sup>だ後、とな  
りのク<sup>ラ</sup>ス<sup>メ</sup>イトは「工<sup>員</sup>？それは一<sup>番</sup>下<sup>の</sup>  
職業<sup>だ</sup>よ！なりた<sup>い</sup>職業<sup>と</sup>い<sup>え</sup>ば、第<sup>一</sup>位<sup>は</sup>  
もちろ<sup>ん</sup>医<sup>者</sup>だ<sup>ら</sup>う。」と朝<sup>ら</sup>れ<sup>て</sup>し<sup>ま</sup>った。

実はまだ幼<sup>い</sup>私<sup>に</sup>と<sup>っ</sup>て父<sup>の</sup>仕<sup>事</sup>の<sup>内</sup>容<sup>が</sup>

さっぱりわからなかったけれども、知って  
いる限りの職業はただ先生と両親の職業、コッ  
クと工員しかなかった。何も知らない私は本  
当に情けないと思っただので、父が工員とい  
うことを全く言いたくなかった。

学生時代、私はよく他人の家庭生活を羨ま  
しく思っていた。というのは両親が仕事のた  
め、とても忙しくて一度も家族旅行ができな  
い。そのうちに、先生という職業が私の心の  
中で一番になった。先生というのはいつも生  
徒と一緒に過ごすし、夏休みや冬休みもある  
から、必ず子供のことを詳しく知っていて一  
緒に遊ぶ余裕がありそうだ。これは大学の卒  
業までも信じていて、すごくなりた職業と  
思っていた。

しかし、軍隊に行くのをきっかけに、自分  
はもろい子という事実を知ってしまった。こ  
の事は3年以來ずっとかくされていて、この  
長い時間、実は気うくチャンスがあっただけ  
ども、ずっと両親の保護のもとに、のびのび

と奪っていった。

その夜、小学生の宿題のことをなんとなく思  
い出した。何にも知らない三年生の私はただ  
クラスメイトの一言で父の職業を恥ずかしく  
思った。こんな無知な私は実は一番情けない  
人間だと思っってしまった。

何時間も反省してやっと思っただ。この23  
年間、なぜ家族旅行が一度も行かれな一方。  
うちの家はお金持ちではないので生活を送る  
ために、両親が必死に働いている。自分は逆  
にのんびり過ごしてしまって、こんな不器用  
な自分をとても後悔した。

うちの育て方は以前よりずっと自分なりに  
決めていくので、去年家族のおかげで日本へ  
留学しに来ることができた。正直に言うとい  
今の両親は実の両親よりも実の両親らしい愛  
をくれた。こんな不思議な出来事でも私にと  
ってつらい感じは全然ないし、かえってあ  
れがたい気持ち溢れてきた。

今、もしも一度「お父さんの職業」と聞か

ければ、私は先生や工員や医者とも言えなく  
 と、どんな職業が偉いかなしかが言えなくな  
 った。「職業に貴賤なし」である。ただ自分  
 自身と家族の期待に背かないで正々堂々と生  
 きていけたら職業が何であろうと人に何と言  
 われようかと恥じることはないというこゝであ  
 る。これからも私の両親に感謝しながら生き  
 ていきたいと思う。